平松伴子著『世界を動かした女性　グエン・ティ・ビン』に寄せて

ベトナム戦争勝利の謎に迫る
歴史的なインタビュー

鈴木　比佐雄

『世界を動かした女性　グエン・ティ・ビン』を書いた平松伴子さんは、「ベトナムに対する日本人の無関心や無知を突き動かした女性」と後世に言われるかも知れない。一九六〇年代末～一九七〇年初頭にかけての私の小学・中学時代に戦争と言えばベトナム戦争だった。アメリカが執拗に行っていたベトナム北部への「北爆」は、終わることがなかった。ベトナムと言えば「北爆」であり、アメリカがどんなに空爆を継続しても、ベトナム民衆は決して屈することはないと、当時私のような子供でさえ感づいていた。ベトナム民衆はなんと辛抱強い人たちなのだろうかという思いが子ども心にもあった。中学生になり新聞を読み始めていた私には、アメリカの理不尽な行為は世界の国々から非難され始めていることが分かってきた。当時の平松伴子さんは、二十三歳で小学校教員になった一九六四年八月にアメリカ政府から発表された「トンキン湾事件」を「アメリカの自作自演だ」と直観したという。アメリカ議会は「トンキン湾決議」をして、ジョンソン大統領はすぐにベトナムへの空爆を開始した。平松さんが直観したように一九七二年六月に「ニューヨークタイムズ」がアメリカ国防省の機密文書を暴露してその「自作自演」が証明されてしまった。けれどもアメリカは東南アジアの社会主義化を恐れて空爆をやめることはなかった。平松さんは一九六九年一月の「第一回拡大和平パリ会談」でのベトナム南部解放民族戦線（解放戦線）の中に次席代表として一人の女性がいることを知って驚いたという。その年の六月には「南ベトナム共和臨時革命政府」の外相に就任して、民族衣装の清楚な「アオザイ」を着て世界の各国のメディアの前に現れたのが、そのグエン・ティ・ビンという女性闘志だった。平松さんはこのグエン・ティ・ビン女史の存在からベトナムの民衆が女性を大事にする懸命な民族であることを知っていくのだ。四十年前のメディアを通しての出会いと憧れが、本書の中にみずみずしく流れ込んでいるのが、本書の魅力として貫かれている。

教師の後には、今もライターを続けている平松さんは四十年間の憧れを胸に秘め続けていたが、二〇〇八年から二〇一〇年の前半までに、グエン・ティ・ビン女史本人から三回の単独インタビューをすることが出来た。本書はその単独インタビューが中心になっている。またグエン・ティ・ビン女史から聴き取られた詳細な経歴書のベトナム語原文とその訳文も収録されている。また日本人カメラマン沢田教一が撮影しピューリッツァ賞を受賞した「安全への逃避」が扉に掲げられ、十六頁にわたるベトナム戦争から今日のベトナムに到る写真が歴史的に編修されている。さらにインタビューに行き着くまでの平松さんのひたむきな思いや、ベトナム戦争を遂行したアメリカ政府やそれに加担した国々のこと、また空爆の基地であった沖縄を提供した日本政府を批判した日本人たちの活動、ベトナムが解放さ

れるまでの過酷な歴史、また枯葉剤に侵されたベトナム民衆の今日的な難題を明らかにしている。

三回のインタビューと経歴書で明らかになったことを紹介してみたい。グエン・ティ・ビン女史は一九二七年にベトナム西南部に生れた。祖父のファン・チャウ・チンは、二十世紀初頭の有名な愛国戦士であり、「海外の文明を吸収して、民族の力にし、国家の独立・自由を目的とするズイ・タン運動を始めた大思想家だった」という。ズイ・タン運動とは「開民知・振民気・向民生」というスローガンで、「人民の知識を開き、人民の心を振るい起こし、人民の生活を向上させる」というベトナム民衆の自由と独立を促した大運動だった。そのような思想の提唱者であった祖父は、フランス総督からベトナム独立を企む論文を書いたと逮捕され死刑を求刑された。しかしフランスの人権保護協会が介入し流刑となった後にフランスに追放された。民族解放の思想的リーダーであった祖父は、フランスで一九四五年にベトナム民主共和国の初代大統領になるホー・チ・ミンを支援し、多くの影響を与えた。独立宣言には祖父の思想が根底にあるといえる。ベトナムに戻った祖父が一九二六年に亡くなると、葬儀や追悼集会が独立運動に発展していったという。生れたばかりのグエン・ティ・ビン女史は、カンボジアに強制移住させられて、プノンペンにあったフランス学校で学んだという。女史は五人兄弟の長女で早く亡くなった母や、出張が多い長期不在の父の代わりに兄弟の面倒をみていた。一九四四年に始まったフランスと日本に対する抵抗するベドミン運動にグエン・ティ・ビン女史は参加し、「平民学務」工作や飢餓救済活動に参加した。「平民学務」は〈「平」は平和、「民」は人民、「学」は教育、「務」は労働〉という意味で、すべての人民がこの四つのことの主役でありそれを民衆に広める運動であった。またもう一つの飢餓救済活動の発端を作ったのは、日本軍の食料略奪であった。日本軍によるベトナム人「二百万人餓死事件」は、独立宣言にも明記されていて、日本人が歴史を顧みようとしなければ、永遠に私たち日本人を告発し続ける公文書となっていくことだろう。ホー・チ・ミン大統領の独立宣言にもかかわらず、フランスは干渉を続けホー・チ・ミン大統領を北部へ追放し、南に傀儡政権を作ってしまう。アメリカもフランスを支援することによって、フランスに原爆を提供してもいいという秘密文書さえ明らかになっているという。そのようなフランス・日本・アメリカの侵略によって引き起こされた分断の歴史の延長線上にアメリカの自作自演の「トンキン湾事件」が起こったのだ。グエン・ティ・ビン女史も傀儡政権に投獄され拷問などをされながらも、解放戦線の幹部となってついに歴史的な「ベトナム和平拡大パリ会談」に登場していく。

平松さんのグエン・ティ・ビン女史へのインタビューに臨む態度は、歴史上の人物に逢う緊張感を超えて、とても親密感が溢れている。ベトナムの歴史を良く調べられていて、「二百万人餓死事件」やアメリカ軍にベトナム空爆のための沖縄基地提供のことなど、率直に一人の日本人として謝罪をしたことも好感が持てた。その率直さが知られざる女史の素顔を明るみにしたと言えよう。真の国際交流とはこのような他国の歴史と文化に敬意を抱き、率直に歴史的な出来事の疑問点を聞きながら相互の理解を深めていくことなのだろう。そのような形で平松さんはグエン・ティ・ビン女史の懐に潜り込んで闘士の胸を開いていって、アメリカが起こしたベトナム戦争の本質を聴き取っていくのだ。そしてその戦争が引き起こした数百万人もの枯葉剤被害者たちを治療・回復させることや、残留するダイオキシンの国土をどう回復させていくかの重たい課題が山積していることが明らかになっていく。そんな困難な情況の中でも、ベトナムほど男女平等で女性の地位が高くて女性が元気な国はないという。ベトナムは他国から数多くの侵略を受けていたので、歴史的にも姉妹の英雄兵士や武将や隊長もいたという。それゆえどんな戦争でも女性兵士は兵器や食料を運んだり、村を守るために勇敢に戦っていた伝統があったという。平松さんはそんなベトナム女性の強靭さをグエン・ティ・ビン女史からじかに聴き取っていき、目の前にそのベトナム女性の人物像が現れてくるような親密さを読み手に感じさせてくれる。独立宣言を含んだ「ベトナム関連資料」と「ベトナム及びベトナム戦争関連年表」もとても貴重な資料だ。本書はきっとベトナムのことを調べる際には欠かせない資料となるだろう。またベトナム戦争の本質やベトナムの今日性を知る場合にも真っ先に読まれるべき書物となるだろう。